

## 南北朝内乱の炎と能登島金頸城合戦



能登島向田集落から金頸城跡（城ヶ鼻）を望む（石川県七尾市能登島）

北朝の天皇を擁する足利尊氏党と大和の吉野に拠る南朝方の対立を基軸とした内乱も、それまで北朝の枢要にあった足利直義（尊氏の弟）と高師直（尊氏の執事）の不和・対立が表面化すると、政局は一変する。観応元年（正平5 = 1350）年10月に勃発した「観応の擾乱」<sup>※</sup>がそのあらわれである。天下の形勢は、足利直義党、高師直（尊氏党）、南朝（南朝）の三者鼎立を生んだ。

北陸においては、直義党の越中守護桃井直常が、南朝方と結んで積極的な軍事行動を開始する。直常軍は能登国にも度々攻め入り、鹿島郡の花見月（現中能登町）・三引山赤蔵寺（現七尾市田鶴浜地区）や羽咋郡の飯山宿（現羽咋市）・志雄保（現宝達志水町）などで、尊氏党の能登守護桃井盛義勢と、激戦を展開した。

### 能登守護軍の能登島攻略

兄尊氏との抗争の末、京都を脱出し北陸道経由で鎌倉に向かった直義は、文和元（正平7 = 1352）年2月、尊氏との戦いに敗北・降伏した後、死去した。だが直義党の越中の桃井直常らは、尊氏に敵対する足利直冬（尊氏の実子で直義の養子）や南朝方と結んで、なおも北陸で尊氏方に抵抗を続けていた。

そうしたなかで、直常の一族の桃井兵庫助が能登に入り、南朝方と気脈を通じていた能登島西方の地頭長新左衛門尉胤連と結んで、反乱を起こすことになる。この間、能登守護には、桃井盛義に代わって尊氏党の吉見氏頼が返り咲き、先に直義方に味方した能登の地頭御家人跡の事後処理にあたっていた。

文和2（正平8 = 1353）年8月28日、守護吉見氏頼方により「能登島の反乱」への討伐戦が開始された。この日、氏頼の嫡子修理亮詮頼を大将とする守護勢が、兵船をもって渡海し、能登島の西端に上陸、島内の嶋島の入江や飯浦で長胤連・桃井兵庫助らの反乱軍と合戦に及んだ。次いで翌29日には、胤

南北朝内乱の対立図

南北朝の争乱 1336-92	持明院統（北朝） 足利尊氏～足利義満（光厳～後小松天皇）		対立	大覚寺統（南朝） 後醍醐～後龜山天皇
観応の擾乱 1350-52	足利尊氏党（幕府軍）		対立	足利直義党（反乱軍）
	足利尊氏（征夷大將軍） 高師直（執事） 足利義詮（2代將軍 尊氏嫡男）	足利直義（副將軍格 尊氏弟） 足利直冬（尊氏子 直義養子） 桃井直常（越中守護）		北畠親房、渡会家行、 新田氏、楠木氏など
能登島合戦 1353-54	桃井盛義（能登守護） 吉見氏頼（能登守護） 吉見詮頼（氏頼嫡子） 吉見伊予守（能登島西方地頭 能登守護代）	対立	桃井直常（越中守護） 桃井兵庫助	長胤連（能登島西方地頭 伊勢守） 富来俊行（富来院地頭）

※ 尊氏の執事の高師直と、副將軍格の足利直義との対立から起きた全国規模の内乱。室町幕府中枢の分裂により全国の諸将も二つに分かれ、さらに権力奪回を目論む南朝もうごめき、情勢は二転三転した。師直は直義党の上杉能憲に殺害されたが、その後尊氏の反転攻勢に遭い、直義は京都から追われた。

連の居館に押寄せて激しい戦いを繰り返し、館を焼き払った。そのため胤連らは、館から程近い金頸城に逃れ楯籠る。

胤連の館は、能登島西方の拠点であった向田の八幡山（現伊夜比咩神社境内付近）に所在したとみられ、金頸城は、向田集落北東の七尾北湾に面した岬（城ヶ鼻）にある、能登島地頭長氏累代の城砦（海城）であった。この城は、海に近い一段低い郭の「水手口」から物資を海上より城中に運びこむこともできる、籠城可能な天然の要害であった。

そのため、破竹の勢いで進撃していた吉見詮頼ら守護軍の攻勢は頓挫し、金頸城を包囲したものの、向田地内の一口・駒崎で陣を構えたまま、攻防戦は暫く休止したらしい。以後合戦の結末は、史料を欠くため定かでないが、やがて金頸城は陥落し、長胤連・桃井兵庫助らは、討死した模様である。

## 長一族の再蜂起と没落

だが、島の地頭長氏一族の抵抗は、これをもって終熄したのではなかった。文和2（1353）年9月の金頸城合戦から1年半後にあたる同4（1355）年3月に至り、長伊勢守胤連の一族・家人らが、再び蜂起したのである。それが越中の桃井氏や南朝方と深く結んだ行動であったことは推測できる。

これに対し能登守護の吉見氏頼は、同月17日、一族の吉見民部少輔を大将として、長一族追討の軍勢を能登島の西方に向かわせ、同月20日、長氏方が籠城する金頸城を包囲した。次いで同月24日には、攻める守護方の吉見軍と金頸城に拠る長胤連の一族・家人の間で、激しい戦闘が展開され、双方に負傷者が続出した。

その後もしばしば合戦はあったが、やがて双方睨み合いのまま厭戦状況に陥った。その後、6月14日に至り、守護勢による総攻撃が敢行され、同日夜には、金頸城が陥落する。以後、能登島で長一族の姿が消えることから、このとき胤連の一族・家人は討死したらしい。



鳴島の石塔と積石塚（能登島合戦の死者を供養したものと伝う）

長胤連は、鎌倉時代初期に大屋荘（現穴水町、輪島市、能登町の一部）の地頭として能登国に入部した、鎌倉御家人長谷部信連の後裔で、信連の子孫は、鎌倉期において、能登の各地で地頭領主として勢力を拡大した。胤連は、大屋荘内穴水保と七尾北湾を隔てた対岸に位置する能登島荘西方の地頭職を相伝する、能登の有力御家人長氏の庶流であった。しかし室町幕府の足利氏に敵対したため、南北朝中期の文和2年・同4年の再度の金頸城合戦で、その一族とともに滅亡する。

## 金頸城合戦の歴史的意義

胤連が北朝を擁する室町幕府の足利氏に敵対し、南朝方に味方した理由は定かでないが、能登島荘が「能登島御厨」とも称して伊勢神宮領であったことと係わるらしく、同じ能登の神宮領の富来御厨（院）（現志賀町富来地区）の地頭富来俊行も、南朝方に属していた。能登の神宮領の地頭は、当時伊勢で勢威のあった、南朝方の外宮神主度会家行あたりからの働きかけに呼応していた可能性がある。文和2年に「新左衛門尉」とみえる胤連が、同4年に「伊勢守」の官途を得ているのは、先に討死した恩賞として、或いは南朝方から遺贈されていたものかもしれない。

一方、金頸城を攻撃した能登守護軍は、守護吉見氏頼からの軍勢催促に応じた、幕府方に味方する能登の武士たちによって構成されていた。能登島東方地頭の天野氏や羽咋郡得田保（現志賀町徳田周辺）の得田氏などの一族・郎党が、参陣していたのが知られる。氏頼は長胤連一族を討滅後、その所領を入手して能登の守護領とした。これによって能登の守護支配の上で重要な、半島の水陸の要衝である能登島の掌握を果たしたのであった。貞治3（1364）年8月の向田八幡宮（伊夜比咩神社）造営棟札には、守護代吉見伊予守の名が、能登島地頭としてみえている。



能登島合戦の位置図（青：幕府方、赤：反乱軍・南朝方）